社 会 科

伊藤 公一・小林 祐貴・大西 弘員・神野 若菜

１ 研究主題との関連について
（１）「教科等本来の魅力」について
社会科は，その名のごとく，私たちが暮らす「社会（民主主義社会）」を学ぶ教科である。戦後，民主
主義社会を日本に形成するため，アメリカのバージニアプランをベースに学習指導要領（試案）が構成
されたことに由来する。このバージニアプランは，社会科を中心とした「民主主義社会」の一員を育む
コアカリキュラムの形態をとっている。そのため，現在でも学習指導要領や社会科では，子どもたちに
民主主義社会の一員として公民的資質を育成することを目標として示している。また，社会科は「Social
studies」と示すように，地理学や歴史学，経済学などの社会諸科学の成果を踏まえた教科と言える。故
に，社会科で習得する教育内容は，社会諸科学の成果につながる知識・概念であり，これを我々が暮ら
す民主社会を知りわかる上でのスコープ（視点）として活用し，社会の仕組みをとらえたり社会問題に
ついて考えたりする手立てとする。さらにそれを基に，様々な社会事象に対して自らの考えを踏まえ価
値判断・意思決定したり，未来予想したりすることもできる。
このように社会科では，社会諸科学の成果をベースに，様々な社会事象を多面的にとらえながら，社
会的な課題や問題を主体的に考え，仲間とともに協働的に解決することができる。この学習過程は，社
会科の教科における特性であり，まさしく社会科授業を通してクラスという小さな民主主義社会を形成
し，社会の一員としての資質・能力を育むことのできる，最も実践的で効果的な教科であると言える。

（２）「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」について
 近年のグローバル時代における社会問題は，既存科学の範疇だけで解決できない場合が多い。そのた
め，これまでトランスサイエンスの観点を踏まえ，様々な立場から子どもに育むべき資質・能力が提言
され，それらを効果的に育むための方法的研究が盛んに行われてきた。社会科が地理学や歴史学，経済
学などの社会諸科学の成果を踏まえた教科であることを考えると，社会科学という領域の中ではあるが，
ある意味トランス的な要素を踏まえた教科と言える。
また内容教科である社会科は，子どもの社会認識を通して公民的資質を育成する教科である。つまり，
社会の見方となる一般性のある知識・概念（内容知）を習得することができるとともに，資質・能力（方
法知）を育むことができる。そのため，社会科では「社会科本来の魅力に迫るための教師の資質能力」
を吟味・検討する上で，児童・生徒の社会認識形成を切り離すことはできない。能力ベースの方法論に
特化した研究は，「這い回る社会科」や道徳の範疇に留まる可能性がある。また，社会科本来の魅力に迫
るための教員の資質・能力を考える上で，子どもたちが将来トランスサイエンス的な見方・考え方によ
る協働的な市民的行動を芽生えさせるためには，まずはその種蒔きとして，義務教育段階での社会科固
有の認識や資質・能力を育成しておくことも必要であると考える。
そこで社会科部では，めざす子どもの姿を以下のように設定する。
〇学習を通して身につけた社会の見方を，日常の社会生活の事象や問題に照らし合わせて考えながら，
学習する意味や価値を実感できる子ども（狭義）
〇学習を通して身につけた社会の見方・考え方を総動員し，身近な日常生活の問題や社会問題を考え解
決しようとする子ども（広義）

（３）検証の方法
ルーブリックに基づいて，児童・生徒の変容の見取りを通して，授業改善及び教師の資質能力の妥